

# 鈍翁・三溪・耳庵に引き継がれた茶室

強羅  
公園

# 白雲洞茶苑

## 近代三大茶人 ～鈍翁・三溪・耳庵～

白雲洞茶苑は1910年代に、益田孝(益田鈍翁)によって建設され、1922年には原富太郎(原三溪)、1940年には松永安左エ門(松永耳庵)が継承しています。

この三人はいずれも戦前の日本経済発展の推進者として有名な財界人ですが、一方で流儀や作法にとらわれず、古美術鑑賞などを通じた自由で楽しい茶の世界を打ち立て、その中心的な役割を果たしました。ゆえに近代数寄の「三大茶人」と呼ばれます。

### 茶室群の特色

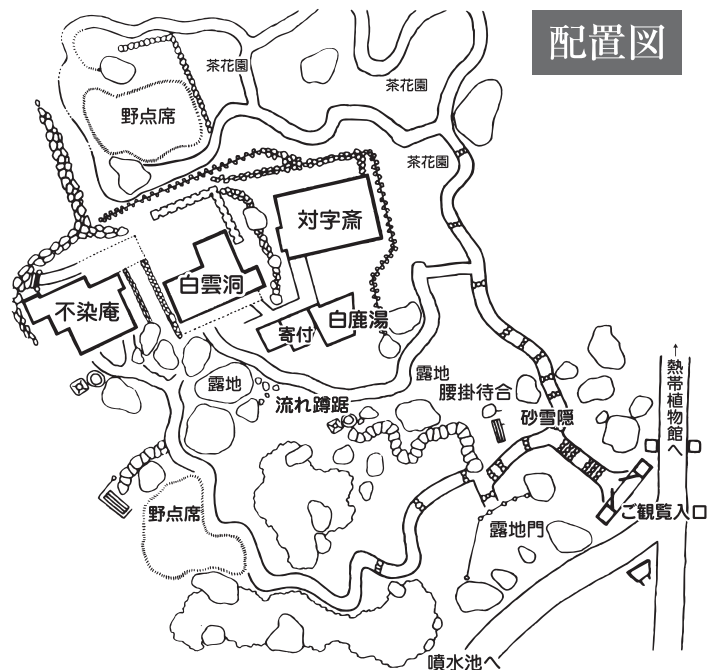
白雲洞茶苑は、寄付を含めて四棟の席から構成されています。岩石の間に点在するこれらの茶室は、全体として深林の中に佇む山びとの住まいを主題として構成されていて、一般的には平坦地に設けられることが多い茶室のなかで、白雲洞茶苑の特徴の一つになっています。

また、伝統的な「草庵侘茶席」の構成を踏まえつつ、近代茶人の自由な茶の精神を建築に反映させ、茶室の形式主義的な束縛から離れました。これは茶道の原点に立ち返ることであり、白雲洞茶苑は近代数寄の茶の精神を偲ぶ貴重な茶席群です。

## 各茶室のご案内

### ■白雲洞 —— 鈍翁の田舎家の席

近代数寄者茶人に流行した「田舎家の席」の貴重な例で、山村農家の古材の持ち味を生かしながら、八畳敷の茶室を構成しています。



### 配置図



茶室用ではなく普通の「囲炉裏」に縁なしの畳、という趣向は、ここで用いられる茶道具に至るまで、まったく自由なものにしました。そのためこの席は彼らにとって使いやすく、根津嘉一郎(根津青山)や小林一三(小林逸翁)をはじめ、多くの近代数寄者茶人の間に流行した、その最初の例として存在してきました。

また、床柱は松永耳庵時代に設けられました。

### ■不染庵 —— 仰木魯堂の作品

二畳の台目畳に四畳半の寄付が付属し、この寄付は相伴席(同行者用席)の機能を兼ねています。外の土廂は低く長く設けて席内の明るさを防ぎ、そのため「にじり口」は省略され、また天井に栗材のへぎ板を張って山家の風情を濃くして、その張り方も伝統的な手法を脱するなど、自由な工夫が細部にまで散りばめられています。

### ■対字齋 —— 住居を兼ねた茶室

二代目、原三溪が設けた席で、窓外に明星ヶ岳の「大」の字を望み、鈍翁筆の「対字齋」の額が掲げられています。

八畳の本席に四畳の立水屋が伴っています。

### ■寄付 —— 石炉をもつ四畳半席

織部流の壁床を持つ席に長方形の石炉があります。四畳半の席ですが、外側の庇の曲木に合わせて畳二枚の耳が切り落とされ、景色の一つになっています。

### ■白鹿湯 —— 茶室に付属する岩風呂

大きな岩の根元を掘り込み、岩風呂が作られています。

益田鈍翁時代以来のものですが、原三溪が「白鹿湯」と名づけ、その板額は現在、対字齋に保存されています。

## 茶室内のご観覧

内部ご観覧料 750円(点茶・お菓子つき)

団体でのご観覧についてのお問合せは、強羅公園事務所へご連絡ください

(株)小田急箱根 施設事業部 0465(32)6827  
〒250-0045 神奈川県小田原市城山1-15-1  
強羅公園事務所 0460(82)2825  
〒250-0408 神奈川県箱根町強羅1300